

碧水だより



—めざす子ども像—
・仲よくする子、かしこい子、たくましく生きる子

平成19年 1月29日 第 9 号
阿蘇市立碧水小学校 羽 山

2 月 行 事 予 定 表

日	曜	校 内 の 行 事	給食
1	木		○
2	金		○
3	土	学童ミニバスケットボール大会	×
4	日	"	×
5	月		○
6	火	生活集会 A L T	○
7	水	4時間授業	○
8	木	校内研修	○
9	金		○
10	土		×
11	日	建国記念の日	×
12	月	休日	×
13	火	部落会 クラブ	○
14	水	職員会議	○
15	木	学力テスト(国 社)	○
16	金	学力テスト(算 理)	○
17	土		×
18	日		×
19	月	三校会(阿蘇中)	○
20	火	音楽集会	○
21	水	校内研修	○
22	木	一日体験入学	○
23	金		○
24	土		×
25	日		×
26	月	身体測定週間 委員会活動	○
27	火	A L T 縦割り班活動	○
28	水	認定会	○

3月の予定
 9日授業参観 PTA総会 学級懇談会 給食試食会
 22日6年終了式 23日卒業式 26日終了式
 30日退任式(予定)

新年あけましておめでとう申し上げます

平成十八年は家庭や子どもたちの事件が多発した年でした。いじめ、自殺、殺人など、子どもたちの生命や安全を脅かされた一年でもありました。

新年を迎えいかがお過ごしでしょうか。

昨年末に教育基本法が改正され、教育改革が叫ばれる中、学校教育も大きな転換を迫られています。

碧水小学校は昨年一年間、子どもたちの姿としては学習に集中し落ち着いた学校生活を送ることができ

ました。

先生方も互いに切磋琢磨し良い雰囲気の中で教材研究や研究授業など毎日の授業に取り組んでいます。

昨年の大きな出来事としては国立教育政策研究所の研究指定校として「評価と指導の一体化」の研究に取り組んでできました。「話すこと」「聞くこと」を中心に子どもたち一人ひとりに具体的な力をつける成果が見られるようになってきました。

また昨年十二月に行いま

した碧水フェスティバルは初めての試みで学校と地域保護者が連携しもっと積極的に交流しながら子どもたちを中心に活動できる場でありたいとの願いが実現に一步近づいた年でした。

今年度も残り二ヶ月となりました。一年のまとめと総仕上げの時期、充分に力をつけて次の学年や学校に進ませてやりたいと思えます。

学校評価アンケートのお願い

保護者から見た学校及び学校教育への評価をお願いいたします。

学校では毎日夜遅くまで残って、教材研究や授業の準備、校務処理に忙殺されています。先生方はとても良く頑張ってくれます。学習や生活指導にも迅速丁寧に対処してくれています。

学校サイドから見ると総体的によく頑張っていると思っております。

しかし外から学校を見たとき、また子どもを通して学校を見たときに果たして

どうでしょうか。ていねいでわかりやすい学校経営か。家庭や子どもへの対応も懇切丁寧か。学校へは意見や相談がしやすいか。地域や保護者に開かれた学校か。など一年の反省として

ご意見をお寄せください。今後の学校経営に生かしていきたいと思えます。

例年この時期に行っている保護者対象の学校評価のアンケートを今後実施しますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

五年生が餅つき

一月二十二日午前中の四時間を使って五年生の学年行事でもある餅つきを行いました。五年生の保護者三十名が協力し親子一緒に餅つきを行いました。できた



餅は保育園や総合学習でお世話になったいろんな所へ配ったり、全校児童にも配りました。前日からの準備や片付け本当にありがとうございました。



上手な叱り方5つのポイント

「小学生を持つお母さんの叱り方」
福島脩美(東京学芸大学教授)より

「認め、ほめ、励まし、伸ばす」ことの大切さはすでに何度も述べたとおりです。ほめることを心がけていても「叱る」場面も逆に多いのではないかと思います。叱ることはほめること以上に難しいことです。感情的に叱ることが多く、叱られる子どもも立場や気持ちになって考えることはなかなかできません。何かの参考になればと思います、上手な叱り方5つのポイントを紹介します。

ポイント1

「わけを聞いてあげる」

一方的に親から叱りつけられると、元氣な子は反発したり、意地になったりして親を困らせます。いきなり叱りつけるのではなく、筋の通った話ができる子には、どうしてそうしたか、考え方を聞いてあげることが大切です。そのことによって、自分で間違いに気づいて、自分なりの反省をすることができるようになります。決して責めるような言い方にならないように注意します。

ポイント2

「親の体面で叱ってはならない」

感情的に子供を叱ると親自身の感情を向けられた子は深く傷つきます。また、親がやりがちな間違った叱り方として、よその子と比較して叱ることがあります。親戚の子、友人の子、同じクラスや近所の子などが多いようですが、大好きな親を悲しませ、怒らせてしまったことで、自己非難の気持ちを長く持ちつづけることが心配です。親は自分の都合で叱ることがないよう心がけます。

ポイント3

「子供の自尊心を傷つけない叱り方」

「ほんとにもう、やんなっちゃた」「あんたのばかきかげんには愛想が尽きた」「あんたもたいした悪ね」などと、ひどい言葉をいつていることが少なくありません。親子だから何を行っても許しあえるという、親の甘えがあるのではないのでしょうか。繰り返し言われていると、その言葉から子供の脳に「頭が悪い」「根性のない」イメージが出来上がってしまいます。そしてそのイメージが、子供の心を縛るようになります。よい言葉によって、子供の脳に肯定的自己イメージを作ることが大切です。

ポイント4

「叱った後の方向づけが大切」

叱る行動は、その行為をストップさせる行動ですが、それだけでは、また叱らなくてはならなくなり、叱ることの繰り返しになります。叱った後で助言することが大切です。「この次からは、もうしない」という決心を確認し、今後、どうするか子供に聞いてみることも大切です。

ポイント5

「自分で決めて自分で努力する」

叱られた子供が、やがて自分で自分を叱るよう育てることが大切です。「叱られてやるから」「自分で止める」へと成長する過程は、一般に、自己制御とか自己調整と呼ばれます。自律の過程にもつながります。今後、いつ、どこで、何を、どのようにするか、具体的に計画するよう助言すると良いでしょう。

楽焼に挑戦

十年ほど前から使われていなかった楽焼窯を整備し使えるようにして五、六年生が楽焼に挑戦しました。温度や火力の調整がことのほか難しく苦勞しました。素焼き、色つけ、本焼きとメ切り(中部工作展)に追われてのあわただしい作業になりました。

子どもたちの豊かな発想で個性豊かな作品ができました。



同和問題の解決のために

我が国、固有の人権問題である同和問題に関する基本的な事柄や具体的対応について考えてみましょう。

同和問題の解決のために、私たちはどのようなことに取り組んだらよいのでしょうか？

1 思い込みや偏見をなくす

私たちは、日常生活において、一人ひとりの個性を見るのではなく、ある集団に、固定的なレッテルを貼って、その人を一方的に評価してしまうことがあります。このことは、偏見や差別につながります。偏見は、科学的な根拠のない話や噂などを安易に受け入れ、ものごとを一面的にしか見ないなど、自分自身で考え、判断しようとする態度から生まれます。

偏見をなくすには、ものごとを正しく見ようとする意欲、相手の立場や気持ちをわかってもらう姿勢、ものごとを表面的にとらえず深く掘り下げるものの方が大切です。

2 迷信や世間体にとらわれない

私たちは、血筋や家柄、迷信にこだわるなど、非合理的な考え方や誤った意識で判断したり、行動したりしてしまうことはないでしょうか。また、ものごとを決め、判断するとき、「おかしい」と感じて、「周りの人はどう思うだろうか」といった世間体にとらわれてしまう傾向があるのではないのでしょうか。

他人の噂話などに影響されない広い視野を持ち、自分自身で考え、判断することが大切です。

3 同和問題の正しい理解

最も大切なことは、同和問題について正しく学ぶことです。そのことで、いかに部落差別が不合理なものであるかに気づくはずですが、このことは同和問題だけではなく、さまざまな人権問題にも共通することです。また、差別の不合理を学ぶことによって、自分自身の人権感覚を磨くことにもなり、これからの生き方に必ず役立つものです。(熊本県人権センター資料より)